

明石市の指定文化財(国・県・市)《平成27年度》

1-2 ^{あかしじょうやぐら} 明石城 櫓 ^{たつみやぐら} 巽 櫓 と ^{ひつじさるやぐら} 坤 櫓 (昭和32年6月18日国指定)



じょうかくけんちく

城郭建築の面影を伝える建築である。両櫓とも明治34年明石公園が御料地時代に宮内省によって屋根回りなどに補修が実施されて大正7年に、県が旧明石城を中心とする一帯を整備し、公園として公開することになった。広さは約55万㎡である。



坤櫓

時代を経て、両櫓は昭和55年10月～57年4月まで大修理された。なお、平成7年の兵庫県南部地震により大きな被害を受けたが、櫓全体を持ち上げ移動させる「曳屋工法」などを用いた大規模な修復が行われ、その美しい姿がよみがえった。なお、明石城は喜春城、錦江城とも呼ばれている。

明石城の象徴として本丸跡に残る巽櫓と(写真右)と坤櫓(写真左)の2棟は、元和5～6年(1619～20)、初代藩主小笠原忠政(後に忠真に改名)のとき建設されたもので、巽櫓は船上城から移築し、坤櫓は伏見城のものと伝えられている。江戸時代初期の



巽櫓

3 ^{さくらまちてんのうしんかんおよびいちざたんざく} 桜町天皇宸翰及一座短籍(明治34年8月2日国指定): 短籍とは細長く切った紙

延享元(1744)年8月、後桜町天皇の父で第115代・桜町天皇が古今集伝授に際して奉納されたものである。天皇は享保20(1735)年から延享4(1747)年まで在位された。(月照寺所蔵)



宸翰短籍

4 ^{ごさくらまちてんのうしんかんたんざく} 後桜町天皇宸翰短籍(明治34年8月2日国指定): 宸翰とは天皇自筆の文章



狩野探幽筆 人麿

明和4(1767)年、第117代・後桜町天皇(2014年現在最後の女性天皇)が古今集伝授に際し、歌聖柿本人麿(人麻呂-平安時代以降は人丸の表記が多い)を祀る柿本神社に奉納されたものである。後桜町天皇は桜町天皇の皇女にあたり、女帝として皇位を継がれ宝暦12(1762)年から明和8年(1771)まで在位された。

(柿本神社蔵)

5 ^{にんこうてんのうしんかんおよびいちざたんざく} 仁孝天皇宸翰及一座短籍(明治34年8月2日国指定)

第120代・仁孝天皇をはじめ、宮公卿から柿本神社に奉納された短籍で、柿本大明神に対する崇敬がどのように厚かったかを物語る資料として重要である。仁孝天皇は、文政元(1818)年から弘化4(1847)年まで在位された。

(柿本神社蔵)

6 **明石城跡** (平成16年9月30日国指定)

明石公園は、明治16(1883)年、私設公園として開園し、2004年約120年の歳月を経て、隅櫓および城跡全体が国の史跡に指定された城跡公園である。明石城は元和5年(1619)年正月に石垣・堀等の普請が始まり、9月から櫓・御殿・城門・堀等の建築工事、翌元和6(1620)年4月に完成した。本丸に御殿を築き、四隅に三層の櫓を配していた。**天守台の石垣は築かれたが天守閣は建てられなかった。**

明治6(1873)年、廃城令公布により廃城となった。

明治16(1883)年 私設明石公園が誕生

明治31(1898)年 宮内省の管轄となり一旦廃園

大正7(1918)年 県立明石公園が誕生

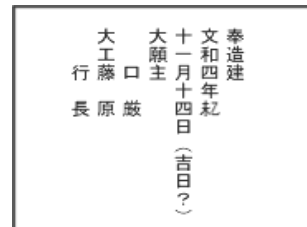


7 **石造燈籠** (昭和38年4月24日県指定)



魚住町中尾の住吉神社にある**明石最古の石燈籠**である。高さ193センチ、参集殿の庭園に置かれていた。花崗岩製で、竿石(さおいし)に「文和四年」(1355)の刻銘がある。1ヶ所、わらび手の先に欠損があるほかは、宝珠にいたるまで実存し、**均齊のとれた全姿と、格狭間、わらび手**

などの細部は、ともに時代の特徴をよくあらわしている。作風は簡素だが、特に正面だけ台座の格狭間に蓮華文を浮彫するといったような、意匠的配慮が示されている点もあり、貴重な遺品というべきである。竿石刻銘は風化のため判読しがたいが、右のとおりである。



(中尾住吉神社)

8 **石造五輪塔** (昭和53年3月17日県指定)

魚住町清水の西福寺にある2メートル近くある五輪塔に「貞和二年二月 時正」(1346年)の銘が彫られている。全体にどっしりした落ち着きを持ち、水輪のふくらみや火輪の反転に豊かな美しさを見せる**南北朝時代の作**である。ここは西福寺の墓地で、西福寺では建武中興(1333年)など**南北朝の動乱による犠牲者を弔う供養塔**として建てられたものと伝えられている。(西福寺)



9 **高家寺本堂** (平成21年3月24日県指定)

太寺山高家寺は、播州薬師霊場第5番札所である。高家寺（天台宗・本尊薬師如来）は荒廃と復興を繰り返して、元和年間に明石城主・小笠原忠政（のち忠真）が本堂を再建したといわれている。「高家寺文書」から少なくとも寛文4年（1664）までには建立されていたことがわかる。本堂は正面5間、側面5間で向拝を持つ寄棟造りの建物である。屋根・柱・基礎等は新しい部材も認められる。市内に現存する中では、最古の仏堂である。本堂は老朽化により柱が腐食、また、阪神淡路大震災によって屋根瓦が落ちるなど破損があり、平成15年に解体修理が行われた。（修理にあたってはできる限り古い部材を残すと同時に痕跡調査を行い図面・写真などで記録保存がなされている）



本堂

10 **麻布著色 盂蘭盆曼荼羅** (昭和59年3月28日県指定)



朝鮮からの伝来図で美術的価値の高いものである。幅135cm、長さ215cmの軸物で、地布は朝鮮の麻といわれ、構図は「盂蘭盆供養図」で仏、菩薩のためさまざまな供養物を壇上に献じ、拝礼する人物が描かれている。渡来品では明石の文化にとって特に意義のあるものである。（浜光明寺所蔵）

11 **神馬図絵馬** (平成22年3月5日県指定)

魚住町中尾の神社に所蔵されている。天明4年（1784）、江井島の市場屋庄助が奉納したものである。描画の緻密さ、色彩の美しさに清新な画風が感じられる。画面の右下隅に「平安 源応挙 花押」が見える。製作優秀で、文化史上貴重なものである。（中尾住吉神社所蔵）



12 **木造 聖観音立像** (昭和59年3月28日県指定)



宝林寺の本尊としてまつられる藤原時代末期の様式を示す聖観音立像である。この像は寄木造、右手は垂下、左手は屈臂して蓮華をもっている。定朝様式の優雅な美しさを持ち、体軀もよく調和がとれている。衣紋の彫線は補修の手が入ったためか少し粗放に見えるが、流麗な衣紋線は失われていない。（宝林寺蔵）

1 3 ^{やくしによらいざぞう}**薬師如来坐像** (平成 1 4 年 4 月 9 日県指定)

この薬師如来坐像は、^{はくほう}白鳳時代の太寺廃寺跡に、小笠原忠政によって再建された**高家寺の本尊**として祀られている。仏高 8 3 センチの寄木造で、穏やかで均整のとれた温雅な姿勢、^{よせぎづくり}浅く流麗な衣紋など平安時代の様式を示している。制作年代についての文献や銘記等はないが様式からみて、**典型的な藤原後期(12 世紀頃)のものであり、平安時代の最末期に近い頃に作られた極めて貴重な彫刻**である。(高家寺所有)



1 4 ^{し び だんべん}**鴟尾と断片** (平成 7 年 3 月 2 8 日県指定) : 鴟尾は建物の屋根の両端の飾り

高丘 3 号窯より出土の鴟尾 1 対及び破片 1 個で、**現存するものとしては最古の部類に属する**と考えられる。制作年代については、形態に注目しその変遷と系譜から 7 世紀中頃、^{へんせん}鴟尾に共伴して出土した須恵器から 7 世紀第 4・四半期という年代が与えられている。(文化博物館所蔵)



1 5 ^{おおくらだに ししまい}**大蔵谷の獅子舞** (昭和 5 4 年 3 月 2 0 日県指定)



大蔵谷の獅子舞は 16 世紀頃に当地に伝えられ、今日にいたるまで地元^{いなづめじんじや}稲爪神社の氏子により、**大蔵谷村の悪疫・災難払い、五穀豊穰祈願を行うもの**として伝承されてきたものである。

2 人立ちの獅子と、ヒョットコ・オカメの面を被った男が**スリササラ**(竹などで作る^{し し}楽器)を鳴らし、^{こつけい}滑稽なしぐさをしながら、独特の囃子に合わせてからむ。また、獅子がだんじりの屋根に上がったり、3 人立ちを行うなどの動きの激しさや、宮の石段で戯れるなどのひょうきんさがその特徴である。(大蔵谷獅子舞保存会)

1 6 ^{たかおかこようせきぐん}**高丘古窯跡群** (5/6/7 号窯) (8/9 号窯) (昭和 5 0 年 3 月 1 8 日県指定)



J R 大久保駅から北へ約 2.5 キロメートル、高丘の丘陵地に^{かまあと}登り窯跡群があった。登り窯は^{きゅうりょう}丘陵などの斜面を利用し地面を掘って窯を築き、下から順次製品を焼いたものである。この付近は、7 世紀~8 世紀にかけて、^{ようぎょう}瓦・須恵器を焼いた窯業生産地である。しかも、7 世紀末の鴟尾の窯跡も確認されており(これは、全国的に和歌山県田辺市と高丘だけである)有名である。**この地に窯ができたのは、よい粘土と燃料があり、瀬戸内海をひかえた古代の交通の便のよさがあったからと考えられる。**

17 ^{たいでらはいじとうあと}**太寺廃寺塔跡** (昭和 53 年 3 月 17 日県指定)

太寺 2 丁目の高家寺にある。高家寺境内
 東南の位置にある土壇上に塔の遺構である
 礎石が残っている。土壇は東西 12 メー
 トル、南北 8 メートル、面積は約 130 m²、
 高さ約 1.5 メートルで、土壇上の東よりは
 礎石の幾つかが旧状をとどめ、いずれも



直径 65 センチメートルの柱座を円形に造りだした痕跡が確認できる。残された
 礎石の配置と寸法から、ここには三重の塔以上の層塔があったと推定される。
 また、塔跡付近から白鳳・奈良時代の古瓦が数多く出土し、太寺廃寺は壮大な
 古代の寺院建築であったことを知ることができる。

18 ^{はまにし}**浜西のヒメコマツ** (昭和 56 年 3 月 27 日県指定)



この五葉松(ヒメコマツ)は、左巻捻幹をアイ
 グロマツに接木したものである。樹齢約 300 年
 の古木であり、異種を接木するという当時の園
 芸技術の高さを示す。古記録によると、今の宝
 塚市山本の坂上善太夫頼泰が 400 年前に異種

間の接木に成功したとある。明治時代から「浜西の五葉松」として名高く、多
 くの人々に観賞されてきた。

19 ^{ふじえべつしよいせき}**藤江別所遺跡井戸内出土品遺物** (平成 21 年 3 月 24 日県指定)

この遺跡は藤江川の河口から約 300 メートルさかのぼった、標高約 1~2 メ
 ートルと比較的低地に位置している。このあたりまで、
 海が入り込んでいたものと考えられている。

平成 5 年(1993)に明石市教育委員会が行った発掘



銅鏡

調査では、弥生時代後期
 の溝と、同時代から江戸
 時代初めまで長期間に
 わたって使用されていた水の湧き出る井戸(泉)
 が見つかった。



車輪石

この井戸の埋土の下部からは弥生時代後期の
^{かめ たかつき}**甕、高杯**数個がほぼ完全な形で出土した。その上層部分からは、古墳時代の土

器とともに様々な遺物が出土し、125点が指定を受けた。内訳は以下のとおりである。

《 車輪石 1 点・銅鏡 9 面・銅鏃1点・勾玉1点・弥生土器甕41点・弥生土器鉢7点・弥生土器壺10点・弥生土器台1点・弥生土器甕蓋1点・弥生土器高杯1点・弥生土器長頸壺1点・弥生土器飯蛸壺1点・弥生土器甑1点・土師器甕15点・土師器壺20点・土師器高杯7点・土師器飯蛸壺2点・須恵器壺3点・須恵器甗1点・須恵器横瓶1点 》計125点 **車輪石**(腕飾り)は、これまで古墳から出土することが多く、井戸内から出土したのは今回が初めてである。(文化博物館)

20 **播州明石浦柿本太夫祠堂碑(昭和48年2月2日市指定)**

人丸町の柿本神社にある。歴代明石城主は柿本神社を崇敬した。第6代松平信之は柿本人麿を敬仰し和歌の隆盛を願い、寛文4年(1664)、豪壮な人麿顕彰碑(亀の碑)を建てた。(1712文字の漢文で綴られた人麿の伝記のこの碑文を一気に読み下したら、台座の亀石が動き出すとの言い伝えがある)



銘の撰文は江戸幕府の儒官弘文館学士、林春斎(林鷲峰)である。明石における文化史的意義の特に深いものである。

21 **月照寺山門(昭和45年5月21日市指定)**



人丸町の月照寺にある山門である。小笠原忠政(後に忠真に改名)以来の明石藩歴代城主の居屋敷曲輪(邸宅)の切手門(正門)であり、明治4年(1871)の廃藩置県に伴って月照寺の山門として移し建てられたことが、月照寺記録から確認できる。(明石城の遺構として数少ない建築の1つである)。伏見城の薬医門でもあったと伝えられる(伏見城落城後、築城中の明石城に運ばれた)。桃山風の豪壮な風格の門である。

22 **織田家長屋門(昭和45年5月21日市指定)**

明石藩歴代家老、重臣屋敷を偲ぶことのできる現存する唯一の長屋門であり、江戸時代初期(17世紀)の建築である。船上城から移築されたといわれている。JR明石駅の北側、明石城跡中堀に沿って約300メートル西の南側にある。現存する長屋門に使用されている太鼓鋳・蝶番・飾り金具は室町時代の様式を備えている。



2 3 石造五輪塔「善楽寺の平清盛五輪塔」(昭和 52 年 2 月 10 日市指定)



市内最古の寺院といわれる大観町の善楽寺にある。高さ 3 メートル 36 センチの花崗岩でできた五輪塔で、堂々たる風格を持っている。かたわらには、「平相国清盛菩提塔」と記した石柱が立つ。善楽寺は、明石川の河口周辺にあり、淡路島とは最短距離の地点であるため、平清盛はこの要所に着目し、寺僧に自分の念持仏の地蔵菩薩を与えて、善楽寺本尊とせよと贈り、寺領 500 石もつけたため、寺僧もその徳を偲び、後世境内の西南隅の小高いところに五輪塔を建立したといわれ、以来、善楽寺の平清盛供養塔として有名である。明石の石造物として価値が高く、鎌倉時代の特色を示すものである。

2 4 住吉神社楼門 (昭和 53 年 3 月 11 日市指定)

魚住町中尾にある。慶安元年 (1648) 年 8 月 23 日わさかむらやまさきせいざえもん和坂村大工・山崎清左衛門建立。明石市の建造物のなかで、建築技法が優秀で、建立年次も明らかで価値の高いものです。2 階づくりの門で、全体の姿勢もととのい、豪壮で細部にわたり、確かな技術の痕跡がある。楼門内に、隨身像一対、木造狛犬一対もある。



2 5 絵馬「加茂競馬の図」(昭和 47 年 2 月 25 日市指定)

魚住町中尾の神社にある。天明 8 年 (1788)、江戸中期の画家、石田遊汀の筆によるもので、この絵は当時有名な京都の加茂競馬を描いたものである。大和絵狩野派の画風を感じさせる筆致で描いている。画面の右下隅に「天明八年戊申初冬 遊汀守善画」が見え、額縁の墨書によって江井ヶ島の市場屋久五郎が奉納したことがわかる。製作優秀で、文化史上貴重なものである。



(中尾住吉神社所蔵)

2 6 **絵馬「森狙仙筆猿の図」(昭和 52 年 2 月 10 日市指定)**

墨書に「文化十一年 甲戌三月」(1814) 狙仙筆・印が捺されている。明石の文化史上、価値が高く狙仙の猿のうちでも製作年次が明らかで、特に優秀なものである。狙仙は西宮生まれの人で、「狙仙の猿」といわれるほど、猿を描くには有名な画家である。円山派の手法を脱し、彼独自の画風を形成している。(柿本神社所蔵)



2 7 **石造狛犬(昭和 58 年 3 月 31 日市指定)**

人丸町の柿本神社にある。神社拝殿前にある石造狛犬で、台座に宝暦 4 年(1754)の銘があり、明石市内の石造狛犬の中で一番古く最大の狛犬である。また、播磨で最も古いといわれている。



2 8 **木造毘沙門天及び両脇侍像(昭和 56 年 3 月 19 日市指定)**

宝蔵寺の本尊としてまつられ、鎌倉時代の様式をとどめている室町時代初期の木造毘沙門天及び両脇侍像である。寺伝によれば、応永 3 年(1396) 閏 5 月 2 日夜、藤原左近なるものが明石沖より引き揚げたものであると伝え「林の毘沙門さん」として古来より親しまれてきた尊像である。(宝蔵寺所蔵)



2 9 **光明寺の和鐘(昭和 48 年 2 月 2 日市指定)**



享保 14 年(1729) 7 月 15 日铸造された。袈裟状の和鐘で、胴には四天王像四軀・鳳凰・獅子を浮き彫りで表した江戸時代の和鐘中の傑作である。銘の撰文に京都浄土宗大本山知恩院第 44 世西音大僧正、冶工に藤原国次とある。慶長以降の和鐘では数少ないものの一つである。(浜光明寺所蔵)

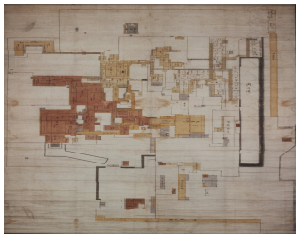
30 **明石城太鼓** (昭和49年2月8日市指定)

明石城築城以来、**太鼓門** (城内の入口に位置する門) に置かれ、**時刻を知らせていたもの**である。太鼓 (胴はケヤキ造り、中央部の周囲約 270 cm、直径 80 cm、全長 84 cm) の内側には歴代の藩主が皮の張替修理をした**墨書銘**もある。**現在、太鼓打ちはロボットとして再現**されている。明石の文化史上に意義の深いものである。



(明石神社所蔵)

31 **明石城御殿平面図** (昭和49年2月8日市指定)



平面図から大別して、**表御殿・奥御殿**に分かれていること、「くずし卍 (まんじ)」の形をとったこの**郭**は周囲に堀をめぐらし、南東に**表門の切手門**、北方に**裏門の蓮の門**を設けて**厳重に構え**られていたこと、東西 216 メートル (120 間)、南北 140.4 メートル、面積 28660.5 平方メートルの広大な規模であったことを知ることができる。**藩主**の居館**の正しい理解のため欠くことのできないもの**である。(文化博物館所蔵)



参考 播磨国明石城絵図

32 **藤村草定作「地球儀」** (昭和49年2月8日市指定)



弘化4年(1847)3月、藩主**松平慶憲**の命令で、藩士**藤村草定**が作成したものである。**藩主が西洋文明吸収に大きな関心**を持っていたことを窺い知ることができる。地球儀の原資料は高橋景保作「万国全図」(文化年間作)と推定される。(地球儀の本体は、直径 35 cm、全体の高さ 55 cm、台の最大幅 52.5 cm) (文化博物館所蔵)

33 **鰐口** (昭和51年2月5日市指定) : 鰐口とは社寺の堂の軒にかけ綱で打ち鳴らす道具

銘によると延宝5年(1677)、中西惣兵衛が僧閑全のとき大明神へ寄進したものである。しかし社号がなく、その縁起はわからない。撞座は**重弁の蓮華文**で、これを中心に条内・外区に調和した蓮華・蓮葉の文様を鑄し、さらに内外区を施して銘を書いている。**明石市の工芸品として美術的に優秀なものである**。青銅製で直径 30 センチ、厚さ 9 センチの大きなものである。銘には「奉寄進、大明神宝前、鰐一口、施主、中西惣兵衛、于時延宝、五丁己七月吉日、求望如意所、住呂閑全代」とある。(柴屋町地蔵講中)



3 4 **緋威金小札胴丸具足 獅嚙前立烏帽子形張懸兜 (平成7年3月23日市指定)**



ひおどしきんこふだどうまるぐそく
緋威金小札胴丸具足は、越前松平家に伝わるもので、天和2年(1682)に明石城主となった松平直明^{まつだいらなおあきら}着初の伝承がある。ひおどしにやや退色が認められるが、金具回りの製作技法も入念で、全体に保存状態が良く、江戸中期初等の優品の一つに挙げることができる。(文化博物館蔵)

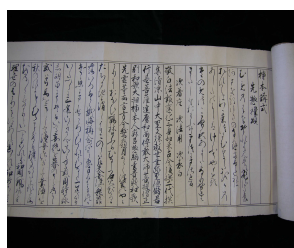
3 5 **三十六歌仙絵及び和歌式紙 (昭和45年5月21日市指定)**

さんじゅうろくかせん え およびわか し き し
とさのひろずみ
三十六歌仙の絵は土佐広澄^{とさのひろずみ}が宝永2年(1705)に描いたもので極彩色で表現されている。和歌は、飛鳥井雅章^{あすかいまさあき}(1611-1679 江戸時代前期の公家、学者、歌人)が書いたものである。大正天皇即位の際の幡裂地^{はたきれじ}と春日大社の神鹿^{しんろく}の角^{つの}を用いて4幅の軸^{よはば}に仕立てたと伝えられている。絵は大和絵の伝統を受け継ぎ優美である。



(月照寺所蔵)

3 6 **柿本人麿神位・神号に関する文芸資料等及明石藩関連資料**



(平成22年3月11日市指定)

柿本人麿没後1,000年とされる享保8年(1723)には人丸社^{きょうほう}に、「正一位 柿本大明神」の神位神号が宣下され、月照寺^{えいたいちよくんじ}は永代勅願寺となり、天皇や公家、明石城主から数多くの和歌が奉納された。月照寺にはこうした奉納和歌とそれに関連する書状や様々な記録があり、それらから当時の事情や背景をよく知ることができ、歴史・文化の研究において貴重な資料といえる。(月照寺所蔵)

3 7 **大和型船模型 (昭和55年3月27日市指定)**



この船模型は、制作当時の様子をよく残している点では全国でも数少ない模型である。文政年間^{ぶんせいねんかん}の奉納と伝えられるが、形式から見て江戸時代後期の文化・文政期と推定される大型大和型船^{ぶんか ぶんせい やまと}の正確な模型である。模型製作年代としては特に古いとは言えないが、細部まで省略することなく丁寧に制作され破損箇所もほとんどない。全長2メートル25センチ、胴幅75センチ、高さ48センチである。(中尾住吉神社蔵)

38 **子午儀** (昭和58年3月21日市指定)



当子午儀は形式から見て、野外観測に使用される携帯用の子午儀であり、19世紀のものであると考えられている。来歴については不明だが、明治7年(1874)に金星の日面通過という極めて稀な天体現象があり、その際来日したフランス観測隊が帰国に際し望遠鏡を一台残して帰ったという伝承がある。この子午儀がその伝承に該当するものではないかといわれている。

(明石市立天文科学館所蔵)

39 **大蔵谷の囃口流し** (昭和50年2月6日市指定)

昭和45年に復活した。毎年10月の稲爪神社例祭宵宮に宮入りした後、氏子の家々をまわり戸口で謡うものである。服装は、ふつう普段着で、採物の扇子を顔の横にあてて三味線にあわせて謡う。歌詞に、うぐいす・扇の由来・忠臣蔵・伏見下り・玉づくし・魚づくし・貝づくし・角力づくし・その他があり、(現在歌われている曲名はうぐいす・山づくし・赤づくし・魚づくし・豊年づくし・扇の由来、等で、節は、うっかり節・ちょんがれ節を使用)江戸時代における庶民の謡いの一端を知るうえで貴重なものである。



(大蔵谷民俗芸能保存会)

40 **大蔵谷の牛乗り** (昭和50年2月6日市指定)



毎年10月の稲爪神社例祭の時に行われる。長い尾のついた5色の笠を被り矢をつがえた弓を手に持った人物が黒牛(現在は牛をかたどった乗り物)に乗って口上を述べ、尾花をつけた者が牛の口取りをし町内を一巡するものである。推古天皇(593-628)の時代、異国から鉄人が大将になり黒牛に乗って日本へ攻めてきたのをこの地で滅ぼした古事を伝えるもので、「播州名所巡覧図絵」にも記録されている。(江戸時代、大蔵谷の庄屋が牛に乗り、昭和20年まで牛乗りを出す組《約50軒で組織する大統》があったが、昭和21年に解散。その後、昭和46年に保存会ができ復活した)

(大蔵谷民俗芸能保存会)

4 1 ^{あかしうら} **明石浦のおしゃたか舟** (昭和50年2月6日市指定)

明石浦の^{まえはまろくにんしゅう}前浜六人衆が、淡路の^{いわや}岩屋に^{ちんざ}鎮座の神をこの地にお迎えし、^{かいなん}海難



^{ぼうし}防止と^{ほうりょう}豊漁を祈ったという漁民の生活の一端を如実に表した特色あるもので、海峡の町明石の夏の風物詩として有名である。

旧暦の6月15日にあたる日(昭和60年より7月の^{さかき}第3日曜日)に、^{はっそう}神をつけた八艘の船を青年が「おしゃたか」「おしゃたか」といながら、小舟を前に投げながら渡るものである。

昔は淡路までわたっていたが、現在では明石の海岸を渡っている。岩屋に^{ちんざ}鎮座していた神さまが、海流による浸食のため社前が危険になったので当地へ遷ったといわれている。(その当時前浜に六人衆《六人の名主》がおり、新しい船を造り、一族郎党を引き連れて迎えたという古事を忘れないよう、毎年この年に岩屋神社の夏祭りとして行われるようになった)

《明石浦のオシャタカ舟保存会》 (岩屋神社)

4 2 ^{ふじえ} ^{まとい} **藤江の的射** (昭和50年2月6日市指定)

藤江村に風水害を起こす^{あくりょう}悪霊を^{かみしもすがた}袴姿の^{いて}射手が村民を代表して^{ほうさくほうりょう}的を射落とし、^{ほうさくほうりょう}豊作豊漁を招く^{みんぞくげいのう}弓の民俗芸能の^{たいさい}大祭である。毎年1月中旬に行われ、^{けんぶんやく}検分役は^{いて}射手(大前・弓立・矢振)を伴い真冬の藤江の海岸で海水で身を清めた



後、^{みさき}御崎^{じんじゃ}神社前で、**大祭の無**

事を祈願する。大祭には、^{くろもんつき}検分役の年寄りは黒紋付、^{いしゆもんつきかみしも}射手は紋付^{とうや}袴姿で頭屋より村内を通り、^{みさきじんじゃ}御崎神社に到着する。^{おおまえ}大前は正面の的(2メートル四方)に向かって

古式に^{のつと}則り21の弓の作法を行い、まず一の矢を放ち、次に二の矢を的に向かって射る。次に、^{おおまえ}大前・^{ゆだち}弓立揃って16方位に亘って21本の矢を射る。こうして^{あくりょう}悪霊を退治させ^{しあわせ}幸福を招く。全村民が集まり、新しい年に祈るこの的射は代々村民に伝えられ今日に至っている

《的射行事保存会》 (御崎神社)

4 3 ^{しみず} 清水のオクワハン (平成6年1月27日市指定)

魚住町清水では、田植えの無事終了を祝い豊作を祈って行われる神事「オクワハン」が有名である。オクワハンは、一般的にはサナブリ（早苗饗≪田植えを終えた祝い≫）で田の神様を送る祭りの一種である。桑の木で作った鋤（オックハン）



を「上の田」の水の取り口で水につけた後、田植えの終わった水田を歩くものである。田植えの終了を祝いまつる行事は全国的に見られるが、この清水地区の「オクワハン」は水との結びつきを明確に伝えるなど、現在では極めて珍しい慣行と考えられている。 ≪清水村民俗行事世話人≫ (清水神社)

4 4 ^{すみよしじんじゃ のうぶたい} 住吉神社の能舞台 (昭和51年2月5日市指定)

市内に残る唯一の能舞台で東播地方の典型的様式（山門、楼門、能舞台、拝殿、本殿と一直線に



並んで建てられ、神前に奉納能をする)を残している。



能が地方にまで伝播した江戸時代当時の生活文化と歴史的変遷を知る資料として貴重で、舞台の構造は江戸初期から中期の様式である。初代明石城主小笠原忠政

が建立、寄進したといわれている。

(中尾住吉神社)

4 5 ^{まつだいらけびょうしよ} 旧明石藩主松平家廟所 (昭和48年2月2日市指定)



明石藩主（松平家）^{まつだいらなのおあきら}松平直明から齊宜までの歴代藩主とその家族の墓59基があり、身分の違いによって形状の異なる往時を偲ぶことができる。齊宜（将軍徳川家斉の25男）夫妻の墓は豪壮な石の扉・塀つきで、御霊屋も龍の彫刻と葵の紋のある見

事なもので、他の藩主のものと異なっている。

(長寿院)

4 6 ^{よこかわしげのぶ} 横河重陳墓 (昭和48年2月2日市指定)

二見町^{かんのんじ}の観音寺にある。慶安2年(1649)に死亡した^{よこかわしげのぶ}横河重陳を^{じっせきけんしょう}子孫がその実績顕彰のため、同年秋、^{みょうしんじょうなん}妙心寺雲南和尚に^{ひぶん}碑文を依頼し建立した。碑文から三木合戦の際、二見の集落が焼き払われ、住民が殺傷される運命にあったのを救ったことや大阪冬の陣で功績



を上げたこと、元和6年(1620)大阪城築城にあたり^{びぜん}備前(岡山県)^{いぬしま}犬島から縦4間横8間の巨石を運んだこと等が記され、往時を偲ぶことができる。

4 7 ^{はやしきほりわりきよき ひ} 林崎掘割渠記碑 (昭和49年2月2日市指定)

元文4年(1739)12月、^{かんがいようすい}林崎地方6ヶ村(和坂村・鳥羽村・林村・東松江村・西松江村・藤江村)が^{ほりわり}灌漑用水確保のため掘割を作ったことを長く子孫に伝えるため、^{やなだぜいがん}撰文を明石藩儒者梁田蛭巖に、^{たはらかりゆう}書を田原何龍に依頼し建立した。碑文から^{まつだいらたかくに}林崎地方は田作りの水に乏しく、わずかな日照りにも苗が枯れ苦しんでいたことがわかる。また、そのため、庄屋達が第5代藩主松平忠国の許可



を得て、明石川上流から現在の明南町の野々池まで溝幅1.5メートル、長さ5,374メートルの工事を明暦3年(1657)10月に起こし^{まんちがねん}翌万治元年(1658)4月に完成させたこと、以来豊作が続き喜びを交し合ったこと等々、が記されており^{おうじ}往時を偲ぶことができる。(現在、野々池は明石市の浄水場となっている)明石掘割土地改良組合が

保有し野々池(明南3丁目)のそばに建てられている。

4 8 ^{カゲユ池古墳(1号墳)} (昭和51年2月5日市指定)

6世紀の古墳(東西16m南北10mの円墳で、現在は市場内の公園の一部として保存)である。^{すえき}須恵器等が出土した。江戸時代、^{かんがいようすい}藤江地域の^{かんがいようすい}新田開発に伴い灌漑用水確保のため造られたため池内に残されていた古墳群の1つである。明石の史跡として、価値が高く、古墳時代において、^{ふじえ}藤江大地が生活の場であったこと^{だいち}の理解に欠くことのできないものである。



4 9 **光明寺の明治天皇行在所跡** (昭和 51 年 2 月 5 日市指定)

安永8 年 (1779) 建造の光明寺書院であって、
明治天皇山陽道巡幸にあたり、明治 18 年 (1885)



8 月 9 日・
10 日行在所
となった。



ご座所の
玉座 (厚畳)・蚊帳の釣環・行在所の建札・
獅子型香炉・旧象の牙の化石の花器・元
僧海雲筆・陶彭沢酪酏の図 1 幅・大内山
小屏風 1 双など当日の調度品が庭園と共

に保存され行在所当時の状況が偲ばれる。(鍛冶屋町の浜光明寺)

5 0 **瑞応寺のそてつ** (昭和 47 年 2 月 25 日市指定)



雌株であり、主幹を中心に 11 本が枝
を拡げ、樹姿は美しい。瑞応寺は天正
(1573~1585) の頃、当地に建立され
た。そてつは、その当時よりあったも
のと推察され、樹齢は 400 年を超える。
瑞応寺は東二見にあり地元の人に
「大寺」と呼ばれている。

5 1 **明石藩主地子免許状** (昭和 47 年 2 月 25 日市指定)



明石藩主が代々、町が繁栄するよ
う町民に地租を免除した書状で、町
民の権利を保証する大切なものであ
り、明石藩行政を知る上での貴重な
資料である。

この書状は町民代表である
大年寄鴻池屋 (中部氏)、大屋 (長野
氏) が保管し、廃藩置県のあと、町
村制実施に伴い明石町役場に引き継
がれたものである。(文化博物館蔵)

5 4 ^{ぬさづかこふん}幣塚古墳 (平成 25 年 3 月 14 日市指定)

魚住を流れる瀬戸川と清水川の合流地点の東岸の段丘突端部に立地し、現在のところ、市内最大（直径 34 メートル、高さ 4 メートル）で最古の円墳である。宅地開発に伴い、平成 4 年（1992）に古墳の南西斜面部を発掘調査した際、葺石が墳丘斜面から見付き、裾部に 20 個体の埴輪が規則正しく配列されていることが確認された。埴輪は基底部しか残存していなかったが、破片から



現在の幣塚古墳周辺



と緒付朝顔形埴輪（左写真）であることがわかった。これらは神戸市垂水区の五色塚古墳（4 世紀後半）の埴輪と特徴が一致することから五色塚古墳の被葬者と政治的に深い関係にあった人物が葬られていると考えられている。発掘調査後、墳丘の約 3 分の 2 はそのまま残され、現代は指定文化財となっている。幣塚には、金の鶏が埋まっているという伝説が残されている。《明治 19 年（1886）、3 年間も続いた旱魃（かんばつ）、風害、水害の凶作に困った魚住の人々は金鶏伝説をもとに、この塚を掘り下げた。しかし、金の鶏は見つからず、一面を朱で塗られた石室から刀身一本と 100 個ほどの勾玉（まがたま）、管玉（くだたま）、小玉が出土したという》、この時に見つかった遺物は、東京帝室博物館（現東京国立博物館）に届出され、その後、地元に戻却されたとのことだが、現代その所在は行方不明のままになっている。



調査現場元風景

5 5 ^{ほうおんじあと}報恩寺跡本堂基壇一括出土瓦 (平成 26 年 3 月 19 日市指定)

奈良の古刹西大寺に『西大寺末寺帳』と呼ばれる古い書物があり、その中の〈明德二年末寺帳〉の播磨の項に 14 ケ寺の名が記されていて、その 6 番目に〈長坂 報恩寺〉という名が記されていたが、この寺の所在は不明であった。

ところが、平成 3 年大久保町西脇鳥ヶ谷で宅地開発計画があり、範囲確認調査が実施された際、寺の建物基壇が見つかり平成 4 年（1992）本格的な発掘調査がおこなわれた。このとき、おびただしい数の瓦をはじめとする遺物が出土し、本堂跡が確認され、その瓦銘文には《報恩寺》の銘があり、ここに報恩寺が位置していたことが確認された。（その他、出土した複数の銘文瓦には「明德 4 年」（1393）「大工彦次郎」「御坊五郎」といった年号や人名



調査現場元風景



銘文瓦

も記されており後に法隆寺の瓦師橋吉重の関与も確認された。天正 7 年（1579）に羽柴秀吉の兵火にかかり焼失したと伝えられる報恩寺の瓦は、焼失時の姿そのままに地下に残されていたため、中世の寺院の一時期の建物の形や葺瓦状態を正確に把握でき、当時の寺院建築の在り方や職人の動向など、明石の中世史を解き明かす上で貴重な資料群である。（出土した龍頭瓦は、現状では日本最古）

子午線とは

明石天文科学館 ホームページ参照



図1

中国では古い時代から図1のように方位や時刻を十二支で表わしました。方位については、真北を「子」、真南を「午」と呼びましたが、子午線とは「子」と「午」の方角、つまり真北と真南を結んだ線という意味です。

したがって、子午線は、任意の地点を通る南北線のことであり、地球上であり、地球上には無数にあります。一般に、明石を「子午線のまち」といいますが、その意味は「日本標準時の基準となる東経 135 度子午線上のま

ち」という意味なのです。

日本標準時の基準となる東経 135 度子午線は、明石市を含む 12 市を通っています。北から京丹後市、福知山市（以上京都府）、豊岡市、丹波市、西脇市、加東市、小野市、三木市、神戸市西区、明石市、淡路市（以上兵庫県）、和歌山市（和歌山県）です。それぞれの町には、目には見えない子午線を表示する標識やモニュメントが建っています。明石市は、明治 43 年に日本で最初に標識を建てたことから「子午線のまち」といわれています。



明石市の登録文化財(平成 27年度)

5 6 いわさけ おもや どぞう 岩佐家住宅主屋・土蔵 (平成 19 年 7 月 31 日 国登録有形文化財)



主屋

岩佐家住宅は明治 37 年(1904)に建てられた住宅で、明治以降によく見られる典型的な農家の形式を示している。主屋は木造 2 階建てで外壁を黒漆喰(くろしゅくい)塗とする塗屋となっており、起り破風(むくりはふ・凸形の破風)とと

もに、重厚な外観をみせている。土蔵は木造 2 階建てで、外壁は白漆喰塗、屋根は本瓦葺(ほんかわらぶき)の切妻造(きりづまづくり)となっている。岩佐家が現存する鳥羽地区は、江戸時代から農業を中心に栄えてきたが、昭和 47 年に新幹線の西明石駅が開業したことで急速な都市化を迎えた。現在では農村の面影を残す農家はほとんどなく、岩佐家が最後に残る証となりつつある。明石市で最初の国登録有形文化財に登録された。野々上 3 丁目にある。



土蔵

5 7 明石市立天文科学館 (平成 22 年 9 月 10 日 国登録有形文化財)

時と宇宙に関する知識を普及することを目的に、昭和 35 年(1960) 6 月 10 日に開館した。現存する天文科学館の中では日本で最初に落成した科学館としてその名を知られている。一番館の玄関



横に通る東経 135 度子午線上に漏刻が設置され、また「JSTM」(Japan Standard Time Meridian=日本標準時子午線)と表示された時計塔がある。この塔には、日本標準時子午線を示す標柱の役割もある。平成 7 年(1995 年)の阪神・淡路大震災では大きな被害を受けたが、平成 10 年(1998)に修復再生、オープンした。平成 22 年(2010)に、開館 50 周年を迎えると同時に建物が国の登録有形文化財に登録された。16 階の天体観測室には口径 40cm の反射式天体望遠鏡が設置され、月 1 回実施される天体観望会で公開されている。

南側には、JR 西日本(JR 神戸線)と山陽電鉄本線が走っており、これらの鉄道路線からよく見えることから、明石のランドマークになっている。

58 ^{なかさきこうかいどう} **明石市立中崎公会堂** (平成 24 年 2 月 23 日 国登録有形文化財)

明治 44 (1911) 年 7 月明石郡 (明石町と 11 ヶ村) に建設された中崎公会堂は、大正 8 年 (1919) 明石町が市制施行により明石市になった時、明石市所有となった。開堂以来幾多の集会や催しなどに利用され、今なお市民の文化活動の殿堂としてその役割を果たしている。

^{かいどうきねんこうえん} **開堂記念公演**では、当時、朝日新聞社に勤めていた^{なつめそうせき} **夏目漱石**が演説した。

中崎公会堂は、^{だいきぼ} **明治に建てられた大規模な木造建築物**として貴重な存在であり、地域のランドマークとなっている。相生町 1 丁目にある。



59 ^{いばらきしゅぞう} **茨木酒造** (平成 20 年 8 月 6 日 県登録有形文化財)

山陽電鉄魚住駅から南西方向、海に近い一帯は江戸時代から続く酒造地帯で最盛期には魚住から江井ヶ島にかけて多くの造り酒屋が並び、**西の灘 (にしなだ)**と言われる程の賑わいを呈していた。現在その数は数軒ほどに減ってしまったが昔ながらの**風情**



^{さかぐら} **ある酒蔵 (明治中期～大正初期)**が残り文化財となっている。また、茨木酒造の入口横に**一棟の洋館 (写真下)**が建っている。現在同社の事務所として使用されているこの建物は**大正初期に建てられたもので木造寄棟瓦葺き 2 階建て**、一部平屋

建て建坪 50 m²ほどで、**明治の建築様式を濃厚に伝えており、貴重なものである。** 魚住町西岡にある。



60 ^{きゅうこくぼこせんきょう} 旧小久保跨線橋 (平成 25 年 3 月 29 日 国登録有形文化財)

^{こくぼこせんきょう} 小久保跨線橋は、当時の鉄道株式会社（現JR）が鹿兒島線の鉄道橋として明治 23 年（1890）、ドイツの会社に発注した^{てつどうきょう} トラス桁（3 角形を組み合わせた骨組み）で、数十年使用してきたものを、昭和 2 年（1927）、そのうちの 2 連、長さ 65 メートルを西明石駅構内の小久保の^{こせんきょう} 跨線橋として再利用したものである。平成 6 年



（1994）、それが^{しんこせんきょう} 新跨線橋（西明石陸橋）の完成によって役目を終えたため撤

去されることになっていたが、長年、市民に親しまれていた^{けい} 経緯から保存に向けた運動もあり、そのうちの 1 基を西明石の^{うわがいけ} 上ヶ池公園に移設したものである。現在では公園内の遊歩道の一部として活用され多くの市民に親しまれている。（上ヶ池公園）

61 ^{なかさきゆうえんち} 中崎遊園地 ^{らヂオとう} ラヂオ塔 (平成 25 年 3 月 29 日 国登録有形文化財)

世界で初めてラジオ放送を開始したのは大正 9 年（1920）にアメリカである。日本では、大正 14 年（1925）に始まった。当時、ラジオは高価で^{ちやうしゆりやう} 聴取料が必要であったため庶民にはなかなか手の届かないものであった。そのため、ラジオの^{じゆしんけいやく} 受信契約を増やすための^{はんばいそくしんぽう} 販売促進法として全国各地に約 460 基の“ラヂオ塔”（野外に設置した^{ちやうしゆそうち} 聴取装置、鉄筋コンクリート製で一辺 120 cm の方形・高さ 204 cm）が建てられた。明石市においては、昭和 12（1937）年に建てられ兵庫県下では 3 番目のスピード設置だった。この“ラヂオ塔”の設置により、昭和 14 年

（1939）の市内のラジオ普及台数は約 4800 台になり^{ふきゆうりつ} 普及率は 47% に達した。（『あかし市民史』1996 神戸新聞明石総局）戦後の昭和 27 年（1952）には全国のラジオ契約者数が 1000 万人を突破したが昭和 28 年に放送開始されたテレビの普及により昭和 32 年（1957）にはその主役の座を明け渡すことになった。“ラヂオ塔”は現代では全国に



約 20 数基、兵庫県内には 2 基（明石・神戸）しか残っていない貴重なものである。

6 2 ^{はとさきとうろうどう} 旧波門崎燈籠堂 (明石港旧灯台) (平成26年4月25日 国登録有形文化財)

明石港は、江戸時代、明石城の築城に伴い整備されたもので、瀬戸内海の物資の交易のため、潮流の速い海峡の潮待ち港として、また、淡路や四国への連絡港として重要な位置を占めており、代々の



港の西の防波堤に立つ旧灯台

明石藩主による改修が行われてきた。

海上交通が発展するにつれて、全国各地に港口の位置を知らせるため灯台が設置されるようになり、明石では、第4代藩主大久保忠職ただもとの時代(1639~1649)に描かれた城絵図の中に、初めて「トウロ」と記した燈籠とうろうが出てくるが、**第5代藩主松平忠国まつだいらただくにの時代に、明**

確に「燈籠堂とうろうどう」と記した平屋建物が描かれており(加賀前田家に伝わる『尊経閣文庫明石城下図』)、この時代にそれなりの構造物が築かれたものと思われる。(第5管区海上保安本部刊『航路標識年表』によると、灯台は1657年(明暦3年)に造られたとある)その後、さらに、遠方から灯火が見えるように檣を高く構えるようになり、現在の石造りのもの(石積みの土台と鉄筋コンクリート製の燈籠部からなる)が現れたと考えられる。(基底部は、縦・横各4.8m、高さ7.3m、土台の北面中央部には幅0.9mの石段)

現存する旧灯台のうち、設置年代は日本で2番目に古く、石造では1番古いものである。^{はとさき}波門崎灯台と呼ばれた旧灯台は防波堤の拡充により、沖合に新灯台が建設されその役目を終える昭和38年まで300年以上にわたり、明石の濤標みおつくし(航路を示す標識)として、**水運の発展に大きく貢献してきた文化的価値の高い構造物である。**平成11年(1999)海上保安庁から明石市に譲渡された。

現代も海峡に面したランドマークとして、市民に親しまれている。